

## 負の連鎖を治める

学院長・宗教総主事 佐々木 哲夫

**1<sup>8</sup>復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。**  
レビ記 19 章 18 節

**1<sup>4</sup>実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、<sup>15</sup>規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、<sup>16</sup>十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。**

エフェソ人への手紙 2 章 14 節～16 節

\*

新約聖書箇所「敵意」との表現があります。敵意は時に復讐へとエスカレートします。旧約聖書箇所「あなたは復讐してはならない。あなたの人々に恨みを抱いてはならない」と記されているとおりです。「敵意から生じる負の連鎖を治める」についてご一緒に学びたいと思います。

\*\*

おおよそ四千年ほど昔のアッシリア帝国やバビロニア帝国の時代、人々は今日と同じトラブルを経験していました。盗み、殺傷、経済事件があり、敵意にかられた復讐もありました。揉め事を治めるために王は法律を定めます。たとえば、ハンムラビ王 [ca.1750B.C.] の法典は、「目には目、歯には歯」で有名です。

第 196 条      もし自由人がほかの自由人の目を損なったならば、彼は自らの目を損なわなければならない。

第 197 条      …骨を折ったならば、彼は彼の骨を折らなければならない。

第 200 条      …歯を損なったならば、彼は自らの歯を損なわなければならない。

目には目、歯には歯、骨折には骨折の同害復讐法です。野蛮なルールに映りますが、当時は画期的に平等なルールでした。経済力、権力、血筋による不公平な復讐を避けたのです。旧約聖書も同害復讐の原理を取っていました。「骨折には骨折を、目には目を、歯には歯を。人に傷を負わせたのと同じように、自分もそうされなければならない」(レビ 24:20)と記されています。申命記は重ねて次のように言います。「あわれみをかけてはならない。いのちにはいのちを、目には目を、歯には歯を、手に

は手を、足には足を」(申 19:21)。これは、同胞ユダヤ人に対する取り決めでした。奴隷は別の基準がありました。「また、自分の男奴隷の歯一本あるいは女奴隷の歯一本を打ち、折ったなら、その歯の償いとして、その奴隷を自由の身にしなければならない」(出 21:27)。パワハラで怪我をさせたなら、奴隷の身を自由にするというのですから、ある意味寛大かもしれません。このような、刑法感覚のユダヤ社会に対してイエス・キリストは新しい規範を示したのです。

あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。(マタイ 5:38-40)

あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。(マタイ 5:43-44)

\* \* \*

今日、国々は戦争を否定し平和の実現に努めることには賛成ですが、自分の国に関しては本能的に対応し、相手が弱くて反抗しないと見るや領土を侵略するという事案が起きています。そのような国際関係の中にあって「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」とのイエスの言葉を聞く信仰者が、どのような姿勢で今を生きやうか考えさせられます。平和への純粋な信仰を貫くあまり、たとえば、絶対非暴力主義のアーミッシュの人々のように近代的生活を離れて農業中心の信仰共同体を営むほど先鋭な道を選択することはしない日本に生きるキリスト者にとって、本日の新約聖書「キリストはわたしたちの平和である」「十字架によって敵意を減ぼした」は重要です。聖書には次のようにも書いてあります。

愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。(ロマ 12:19)

「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と言い、また、「主はその民を裁かれる」と言われた方を、わたしたちは知っています。生ける神の手に落ちるのは、恐ろしいことです。(ヘブ 10:30-31)

すなわち、解決を神に委ねることは、決して無力な気休めではなく、「恐ろしい」解決に委ねるということです。そこで重要なのは祈りです。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言う。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」

(マタイ 5:43-44)

\*\*\*\*

以上は、自分を守ることに限ってでした。しかし、敵と裏腹の関係にあるのが自分自身です。自分自身への戒めとして二つのことが連想されます。第一は、愛を持っているかです。第一コリント13章の愛の章句を連想いたします。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

(13:4-7)

愛とは、この中の一つだけというのではなく、全部に顔ける者になるということだと考えられます。第二は、永遠の命です。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

(ヨハネ 3:16)

敵意にとどまるのではなく十字架による赦しを知る者として生きたいと願います。

(2024年4月24日)